草津東　町内だより　（令和五年）2023/ 3/1　第474号

この人を訪ねて＃221

建設現場になくてはならない〝スペシャリスト〟

広藤企画・足場業オーナー　草津庚午消防分団長

伊藤博之（いとう　ひろゆき）さん55歳

足場業として独立しておよそ25年。新築家屋等の建築現場で「足場」を設置し、〝建築〟をサポートしている。数年前愛妻を病で亡くす。草津庚午消防分団長しても活躍している。母親の悦子さんはいまなお元気で3年前、83才まで現役でデパートに勤めていた人。一緒にインタビューさせてもらった。

街中の「足場」が目に付く

街なかを歩いていると、新築家屋、ビル・マンションの工事現場や解体現場などで鉄パイプ状の資材で囲んであるところに出会う。これが「足場（あしば）」である。伊藤博之さんは、この足場の設置、解体を生業（なりわい）として、およそ25年になる。

一人親方として独立

地元草津小、庚午中学校から東広島にある県立西条農業高等学校を1986年（昭和61年）伊藤さんは卒業した。広島市内の石油スタンド、運送会社を経て、建設会社に入社するも、32才のとき友人と一緒に「足場」業をはじめ、しばらくして「一人親方」として「広藤企画」を立ち上げる。

次は「足場」と「足場職人」について伊藤さんから聞いたことをもとに、資料を参照し説明をする。

「足場」について（足場工事マガジン他参照抄）

★名称は足で踏め、歩け立てる場所からきている。工事現場の「足場」は、建築工事・改修工事・高所作業などのため、作業の便宜ためや、建設作業員が安全に作業するための足掛かりや、資材落下を防ぐために仮組み立てる「構造物」である。★足場の組み立て、その解体は鳶職（とびしょくの主要な作業の一つであり、国家資格を持った「足場組立等作業主任者」の指示のもとで作業する。ときにはイベント会場設営、舞台ステージ、照明の組み立ても行う。★建設業の死亡労災事故の第一位は転落事故であり、建設作業員本人の不注意はさることながら、組み立て不良での事故はなくさねばならない。また、足場は仮設施設のため、しばしば強風など荒天時には倒壊の危険があるので注意が要求される。★主な足場の種類　①単管足場：鋼管で作られた単管パイプに、クランプ（とりつけ用具）で基本部材を組み立てる。②枠組み足場：鋼管を門型に溶接した建枠を中心に、ジャッキ・筋交・鋼製布板などの基本部材を組み立てる。高層ビルの外壁面に沿って設置する。③くさび緊結式足場＝ビケ足場：一定間隔に緊結（きんけつ）部を備えた鋼管を支柱（最長3.80m）とし、手すりや筋交等を支柱の緊結部に、くさびで緊結する。特徴＝ハンマー一本で簡単に組み立て、解体が出来る。以前は木造家屋など低層住宅工事用（3階建）およそ12mの足場として多く使用されていた。応用自在なこの足場は機能性が高く、安全性に優れている。最近は中層建築工事用や高層建物の外壁の塗り替えなど、短期間の補修工事にも使用が増えている。伊藤さんもこの工法を採用している。★以前は丸太を針金で結わえた足場が用いられていたが、現在は使用されていない。

「足場職人」とは（足場工事マガジン他参照抄）

★建設現場の高所で作業を専門とする職人のことを「とび職人」と言い、この範疇に足場とび＝足場職人が入る。厳密には「とび職人」は、ビルやマンションの高所の施工をする職人で、「足場職人」は低層住宅までを専門に行う。いずれもどの業者よりも先に現場に乗り込み、工事現場を鉄骨で仮囲み組んでいく。作業工程は三工程に分かれ、先行足場、本組足場、解体の3工程に分かれるそのため「建設は鳶に始まり鳶に終わる」と言われる。★とび職の歴史は古く、飛鳥時代にはとび職だと思われる記述がすでにあり、江戸時代には冠婚葬祭などで活躍し、街を活性化させ、人気のある職業だった。★以前とび職人はオランダの子供が履いていたズボンを起源にもつニッカポッカという作業しやすいズボンを履いていた。伊藤さんによれば最近は流行らないのだそうだ。

コロナ禍で仕事が半減

現在伊藤さんは、積水ハウスの仕事をおもに下請けしている。消費税アップのかけ込みの需要のときは、戸建て住宅用の足場作業が月に20～30棟はあったが、コロナ禍が影響してか、月に10棟に仕事が減っていると伊藤さんは肩を落とす。「展示場に人が来場しない、メーカーの営業マンが、顧客訪問しないなどが影響していますね」「しかし最近少しもどってきている気がします（笑）」。

伊藤博之
（いとう　ひろゆき）
広島市西区草津本町在住
1967年12月同所にて生まれ、草小
庚午中、県立西条農業高（現学校）'86年
卒業、広島アポロ、トナミ運輸、綾建設
を経て'98年足場業「広藤企画」独立
草津庚午消防分団長　家族：実母

草津庚午消防分団長に

伊藤さんには草津庚午消防分団長というもう一つの顔がある。5年前、西区庚午中在住の藤井一三前分団長のあとを受けて就任している。消防署は常備の消防機関であるが、消防団は消防署の管轄下にあり、平素は生業を持っている住民が、火災・風水害・災害時に消防団人になり、〝消防活動等〟を行う非常備の消防機関である。一旦ことあると出動、消防署の保管活動とはいえ、後方支援活動をする。緊急連絡を受け、第一出動は自地区で、第二出動は近接他地区での火災・災害時に駆けつける。

7年前の2016年3月、老朽化のため車庫が宮島街道沿いの草津東二丁目から、庚午中二丁目に新築移転している。広島市西消防署管内の消防分団は、近いところから、草津庚午、古田、井口、己斐など8分団がある。幸い近年管内で大きな出動がないそうだが、この一月には、各地のとんど祭りの立会い、消防応援行大会にも〝出動〟して多忙だったと伊藤さんは語った。

錦鯉が跳ねている

伊藤家の横に3メートル台の水槽があり、中に60～70cm級の錦鯉十数匹が泳いでいる。知人からもらったと話すのだが…。通りがかりの人がよく覗きにくるらしい。子どもがいない伊藤さんは、ペット替わりに飼っているのかもしれない。「一度坂町にある錦鯉の品評会に出してみたいですね（笑）」。

83才まで現役デパート勤務にはビックリ

今回、伊藤さんの自宅でインタビューしていると、部屋の中のたくさんの素敵な「帽子」が目に入った。伊藤さんに聞くと、お母さんの物だという。早速お母さんから〝話〟を聞くことになった。筆者はびっくりした。お母さんの名前は伊藤悦子さん。失礼ながらお年を尋ねると86才。なんと83才まで、現役で八丁堀の三越の帽子売り場の店長をしていたと云われる。

旧天満屋でもブランド物女性服の店長

帽子はその時扱っていたもので、自分でも買い求めたものだそうだ。さらに経歴を聞くと、50年前、ご主人伊藤さんの父親を亡くし、一時八丁堀で喫茶店を営んでいたが、洋裁の免許があり46才のときに八丁堀にあった旧天満屋の3Fで、有名ファッションブランド輸入物専門の女性服売り場の店長を務めた。少しブランクの後、62才から20年近く前述の三越に勤めていた。

詩吟の名取　フラダンスも

どうりで、小柄ながら背筋がピンと伸び、声に張りがあった。最近までフラダンスをやり、詩吟は吼山流（こざんりゅう）の名取（伊藤嘉星）だそうだ。「子どもが小さいころ、子ども会や、本町体協には入っていましたが、デパート勤めのため電車で朝早く出て、夜が遅かったので、ご近所付き合いはほとんどありませんでしたよ。でもよく仕事をしましたね」と。子どもは長女はとくなり、長男の伊藤さんと、姉の次女がいる。

神輿会の会長も引き受けていた

草津八幡宮例大祭のお神輿は、コロナ禍のため3年休止しているが、伊藤さんは神輿会の会長を数年間つとめた。横でお母さんが、「この子は人がいいからすぐなんでも引き受けてくるんですよ（大笑）」と仲の良い親子の会話が続く。

（編集　倉田和峰）

真田前々分団長の叙勲祝賀会にて。左：祝辞を述べる伊藤分団長

神輿保存会長だった頃

エサをやると寄って来て可愛い

棟上げ前に先行足場、本足場のとき手すり等をとりつけ、家屋完成後足場を解体する。半日から一日の作業だ

円満な伊藤さん親子

左：お気に入りの帽子を手にお母さん
室内に色々な帽子がかざってある
実力あれば、年令に関係なく働ける証